

重要文化財 園城寺一切経蔵（経堂）

[>> 三井寺 HP「一切経蔵、八角輪蔵」](#)

参考文献：『重要文化財園城寺一切経蔵（経堂）・食堂（釈迦堂）保存修理工事報告書』（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 編集 -- 滋賀県教育委員会 2012.2）

以下を参考に妙楽寺輪蔵を想像してみてください。

「一切経」とは

「一切経」とは仏教の一切の典籍を集成したもので、

- ・経(仏の教説を記したもの)
- ・律(仏の教誡を伝えたもの)
- ・論(仏の教説を注釈・解説したもの)

の三蔵がある。

そもそも日本の仏典は、インドで編纂して中国で漢訳されたもので、中国で仏典の漢訳が盛んになると、漢訳した仏典を整頓する必要が生じて四世紀には経録(仏典目録)が作られるようになる。その中の開元 18 年(730)成立の「開元釈経録」は、「一切経」に編入する経典を 5048 巻としており、これがその後の「一切経」編成に大きな影響を与えたという。

園城寺の「経蔵一切経」は「元版」と「高麗版」が合わせてほぼ 100 パーセントを占めていることから、経典類自体が舶載品であるといえる。

「経蔵一切経」の経箱は大陸か朝鮮半島で作られたものが、のちに日本へもたらされたといえる。ただし、この時経箱だけを持ってきたとは考えにくく、当然経典類も大陸か朝鮮半島から一緒にもたらされたと考えべきである。これらの一切経が国清寺にいつどのように安置されたかということについては詳らかではないが、入元僧が将来した以外にも大内氏が日明貿易で得た可能性も考えられる。

総じて、中国で版行された「元版一切経」が経箱とともに舶載されて周防国清寺に安置された。弘治 3 年、毛利元就の防長経略の中で一部が失われたため、慶承の勧進により

永禄2年に補経が行われた。そして、慶長七年、毛利輝元によって園城寺に寄進されたということになる。

経箱の輪蔵への収納方法

「経蔵一切経」は八角回転式の輪蔵の各面に格子状に組まれた棚が設えられており、「一切経」は経箱に入れた状態でこの棚に収められていた。「経蔵一切経」は、これを収納する建造物である輪蔵とともに伝来していることがその歴史的価値を高めているのであるが、実は経箱の輪蔵への収納方法には特徴がある。

一般的に経典類の輪蔵への収納方法としては、格子状になった各棚に

- ① 経典類を収納具に入れずにそのまま納める
- ② 経典類を経箱に入れて納める
- ③ 経典類を棚にはめ込まれた引き出しに入れて納める

の三通りに大きく分類することができる。また、経典を収納する順番は典拠となる経録に記載された順番となり、版経の多くは「千字文」によってその順番を明記している。

（千字文とは、文字習得のための教材として編んだ字種の異なる一千字の韻文で、250の4字句から成る。例えば「天地玄黄」、「龍師火帝」など）

「経蔵一切経」は収納方法としては②となり、千字文によって順番に並んでいる経典類が同じ千字文をもつ経箱に収納されて、輪蔵の棚に置かれていた。経箱は大部分が木製漆塗で印龍蓋式となっており、蓋の甲盛は高く四角を丸く仕上げている。身の正面やや上方には、経箱を引き出すための取手となる菊形の飾金具が取り付けられている。経箱の蓋と身の正面には陰刻して朱を施した千字文が表わされており、輪蔵の格子状となった算木の部分に書かれた千字文と合致させることで、経典の配置が一目でわかるような工夫がみられる。

経箱は正面となる特定の一面の右から一列目の上から始まるのは同じであるが、そこから左隣へ進んでいることがわかった。つまり、上から一列目を向かって左回りで、ぐるっと一周し、次に上から二列目、三列目と周回しながら順番に下方へと向かう順番となっていたことが明らかとなったのである。これは筆者の管見の限りでは国内唯一の例であり、輪蔵への「一切経」の収納方法を考える上で非常に興味深い事例である。

重要文化財 園城寺一切経蔵（経堂）の輪蔵と一切経

輪蔵が「回す」という機能を備えた構造物であるという前提に立てば、こうした収納方法があってももちろん良いはずであり、「回転する輪蔵」という存在を強烈に意識した結果として、むしろ理にかなっているのではないかとさえ思われる。

経堂内での輪蔵の納まり

当初の八角輪蔵真柱基礎廻りの納まりは、「国清寺一切経蔵の礎石」の上端の窪みに園城寺一切経蔵八角輪蔵真柱と同様の鋳鉄製の軸受けを据え、鋳鉄製の軸受けの底(下面)にはY字の爪が取り付けられており、爪が礎石の溝に依って、八角輪蔵回転時の軸受けの回転を止めていたと推定される。

[国清寺一切経蔵の礎石（山口市の指定文化財） >>](#)